

トルコ・シリア・ヨルダン・エジプトにおける完新世乾湿変動の復元

Humid-dry environmental changes during the Holocene in Turkey, Syria, Jordan and Egypt

鹿島 薫 [1]

Kaoru Kashima[1]

[1] 九大・理・地球惑星

[1] Earth and Planetary Sci., Kyushu Univ.

<http://paleobio.geo.kyushu-u.ac.jp/kashima/kashima.html>

三菱財団助成（2002-2003）および科研費海外学術調査（2003-2006）によって、トルコ・シリア・ヨルダン・エジプトにおいて、完新世の気候変動の復元を目的とした学術調査を行った。この結果、同地域においては、完新世において何回かの顕著な気候変動事象が認められ、それに伴って、湖沼水位変動などの乾湿環境の変化が生じたことが明らかとなった。さらにそれらの変動は、当時の人間生活、遺跡の立地と放棄に大きな影響を与えていたことが推定されたので、ここに報告する。

トルコ中部

トルコ中部のトウズ湖、セイフェ湖、コンヤ盆地、カイセリ（キュルテペ遺跡）、クルシェヒル（カマン・カレホック遺跡）で掘削調査を行った。トルコ中部では、最終氷期最盛期には湿潤環境となり、多くの湖沼湖盆で、湖域の拡大が認められた。しかし、ヤングドリラス期以降、完新世初期に急激な乾燥化に転じ、コンヤ盆地をはじめほとんどの地域で、湖域の縮小が確認された。BC4500 頃から再度湿潤化が始まり、湖域拡大と湖水の塩分低下が認められた。以降、周期的な乾湿変動が継続し、BC200-BC/AD、AD1000 頃などに湿潤期が確認された。

このような完新世中期における再湿潤化は、トルコ中部における新石器時代とその直後の遺跡の分布の変動とよい相関が見られた。

シリア東部

シリア東部ハートニエ湖において掘削調査を行った。ハートニエ湖では、最終氷期最盛期に湖域が拡大していたものの、完新世に入って湖域は急速に縮小した。しかし、BC6500 頃から湿潤傾向に転じ、湖域拡大と湖水の塩分低下が珪藻ほかの微化石分析から確認された。しかし、BC4500 頃から再び乾燥化が始まり、それ以降の顕著な湿潤期は確認されなかった。

ヨルダン南部

ヨルダン南部のワジハブトレイハ遺跡（先土器新石器時代）周辺の池沼において、掘削調査を行った。同遺跡周辺では、完新世初期には湿潤傾向であったものの、続く土器新石器時代以降 BC6500 頃から乾燥化に転じたことが明らかとなった。

エジプト

ナイル川西岸のカルーン湖において、東京大学が採取した湖沼ボーリングコア試料を用いて分析を行った。珪藻群集、有孔虫群集などの変動から、湖沼の水位変動、湖水の塩分変動が明らかとなった。BC4500 頃、BC200-BC/AD、AD1000 頃などと、トルコ中部地域とほぼ同時期に、湖水の変動が見られた。しかし、トルコにおける湖沼縮小期に、カルーン湖では湖水位の上昇がみられるという逆相関の変動が認められた。

このような乾湿変動の地域的变化は、同地域における気候変動モデルを構築する手がかりとなることがわかった。